

# 花祭り調査を契機とする研究の構想について

丸山 宏

平成21年12月13日に奥三河の中在家において行われた花祭りを、また平成22年1月2日から3日にかけて古戸において行われた花祭りを見る機会を得た。従来、香港・台湾をはじめ、中国の各地（雲南、四川、福建、江蘇、内モンゴル、湖南など）、フィリピン、マレーシアで祭祀儀礼や宗教職能者を調査したことがあったが、日本国内ではほとんど調査経験がなかったために、非常に興味深く思い、様々なことを連想した。

まず、花祭りに限らないであろうが、祭祀芸能を研究対象とする場合に、実際の現場において突出して現われてくるのは、独特の力のこもった音と身体の動きであるということが再確認できた。私自身の研究では、中国史および中国宗教の分野の文献を解読すること、つまり文字を読むことが第一義的に重要である。しかし祭祀芸能の研究では、背景や手段のごく一部にだけ文字の伝承が存在するとしても、やはり第一義的に重要なのは、音と身体の動きであろう。これらを音楽研究やパフォーマンス研究の専門的な手法で学術的な言葉に直しながら明らかにして行くことがどうなされるのであろうか。文字資料を読むのではなく、祭祀芸能の音を読み、身体の動きを読み、さらにそれを論にするために何らかの言葉を用いて何が起っているかを表現することが専門的になされるはずであり、調査に参加された異なった専門の人たちによる成果から学びたいと考える。

花祭り調査後に私が思い至った研究課題は、専門的に従来行ってきた道教の儀礼文献の研究と、今回の調査との接点を、道教儀礼の側では何処に求めるのが最も挑戦的かという問いかけであろう。花祭りで注目できた興味深いことの一つは、榊鬼が行った「へんぺ」すなわち反閉のステップである。これに相当するのは道教では禹歩ないし歩罡と呼ばれるステップであり、特に儀礼空間を結界する禁壇儀礼で多く見られる。禁壇儀礼は台湾南部では鬼の面をつけた命魔を道士が斬るパフォーマンスがあり、台湾北部では道士が四霊（青龍・朱雀・白虎・玄武）の所作を演ずるパフォーマンスがある。この禁壇儀礼の歴史と現状を今回の調査を契機に考え直してみたい。道教の禁壇儀礼については、私自身の既往の調査の収集資料（文字資料と画像音声資料）も利用して考察していくことができる。

花祭りを見てもう一つ考えさせられたのは、より大きな問題である。花祭りは現在では変化を被り過去のように完全ではないようであるが、もし完全に行われたとしたら、いったいかなるモチーフが展開され、全体としてどのような構成になっているのか。それが例えば宋代以降の道教の黄籙齋といったきわめて複雑な構成を持つ大規模な儀礼のモチーフの展開や全体の構造と比べた場合に、どこまで類似し相違するのか、そうした類似や相違の原因は、どのように解釈することができるのか。あまりに大きい問題であるから、研究成果に結びつくか否かは別として、花祭り調査が、このような問題に思いをめぐらせる契機となったこと自体は重要であると受け止めている次第である。